

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別取扱承認雑誌第六二七号
平成二十六年十一月一日発行(第百十七卷第十一号)

ホトトギス

十一月号



俳句随想〔三百八十九〕

汀子

一年の後半はイベントが多く、募集句の選がどつと来る。毎月の決まった仕事の他にある。気を入れて仕事にかからねば直ぐに締め切りが過ぎてしまう。二週間に一度の信濃毎日の俳句の選もすぐに次の分が来てしまう。ねんりんピックの選、国民文化祭の選、伊賀上野の芭蕉祭の選。子規顕彰俳句大会の選、日本伝統俳句協会全国俳句大会の選、等々。各月の花鳥諷詠選集の選、ロータリーの友の選等々、今、八月が終わろうとしている時、ようやくトンネルを抜け出した思いになった。

しかし、個人的にお引受している会の選句や、毎月のホトトギスの仕事の一部が遅れている。ともかく、俳句随想をいま書いていることは、朝日俳壇の選句を終えて、芝公園の仕事部屋に帰って来てワープロに向っているのである。今月の俳句随想は、私のぼやきになってしまった事をお許し願いたい。

朝日俳壇の選句は毎回発想の新鮮な俳句に出会うことがある。それらは季節が働いていれば生き生きとした作品になることを発見したが、季節が生きていない一句は事柄が斬新であっても生きて来ないのである。しっかり季節を勉強したい。

旬日記 汀子

平成二十五年十一月四日 ロイヤル俳優

なほ凌ぎ易き日のあり冬めくもいつも見て山茶花旅に新鮮に聞いてみし甲斐の大地よ神無月大事終へたる心地年改るハンドルを握れば冬の遠ざかるハンドルを握れば年の改る

十一月八日 工業倶楽部

歩を止めて八手の花でありしか大事終へたる心地ふと冬めくし冬めくし油断せしにはあらねども

十一月十日 下萌句会

諏訪湖まで六百キロや神渡山茶花の散り敷く門に帰り着く

十一月十二日 大阪倶楽部

初時雨いざなふ雲を仰ぎけり旅疲れとも風を聞く家居風を聞きて夕べの家居かなふり返る日々風に吹かれつつ石路の花咲けば忌日と思ひけり風を花ちて六百キロの旅

十一月十二日 絹業倶楽部

初霜の光となりて夜明け来し宵の風忽ち冬でありしこと

オリオンの午前三時の冬仰ぐ稿債も冬を伴ひ来り

十一月十四日 清交社隠れ里吟行会

すめらぎの悲しみ偲ぶ湖の冬はるばると来てみそなはせ湖小春かく晴れて時雨することもなき湖畔哀しみを語りつがる枯木立我等今土足を脱ぎて冷たさよ

十一月十六日 中国ホトトギス同人会

見晴らしへつづくきざはし露寒に鷹渡る一羽につづく目の行手我等今土足を脱ぎて澄の冬

十一月十七日 中国ホトトギス俳句大会

どこからも絵になる視界冬紅葉咲くもあり散るも風情の街の冬郷愁の案内ここより冬の街

十一月十九日 有恒俳句会

冬めくき旅路に心許せしか山茶花の散り初めて又散り継ぎて風の空の青さをみそなはせ北窓を塞ぎて旅に出でし朝落日に置く旅心冬めくし瀬戸の海染めし落日冬めくし風の通り抜けけたる庭と見し

十一月十九日 無名会

一夜吹き荒れし風朝戸繰る快晴の二日の旅路神の留守近道は今日も抜けゆく神の留守いつまでも忘れ得ぬ人神の留守今日のことも今日遣り果せ冬の夜

締切に追はるる日々や神の留守

十一月二十日 夏潮句会

黄落の掃かざる如くありにけり萩黄葉には孤高なる光置く散り尽くすまでの落葉を又掃いて落葉掃き終へし庭とも思はれず夕風の渡る黄落誘ひつつ冬構濟みし狭庭に日当れる

十一月二十二日 時雨句会

枯葉とは言へぬ彩掃き惜む一本の櫂の落葉尽すまで青空のいづこが時雨いざなへる祝ぎの日の余韻十一月もなほ

忘れしや十一月の時雨会掃き寄せて枯葉の音となりゆけり

十一月二十三日 関西ホトトギス同人会

落葉掃くこときりもなし京の街この冬の紅葉に混める京へ旅

十一月二十四日 関西ホトトギス俳句大会

名苑に言葉は要らぬ冬紅葉語らばや永観堂の冬紅葉

十一月二十八日さらぎ会

吸ひ込まれゆく鷹の空又一羽摘むことのなき茶の垣に花咲かせ言葉には尽せぬ京の冬紅葉

稿債の半ば師走も近づきて

十一月三十日 句会と講演の会

歴史とは枯野の果にありにけり一枚の新海苔旅をかがやかす華やぎの彩り脱ぎし枯野かな

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十五年十一月一日 カトリック新聞選者時

身に入みて未来を拓く覚悟かな
十一月二日 岡山開む会

虎もつとしつかりせよと秋惜む
ライオンの視線の先に神の旅
冬近しやはりに気になる虎の檻
雨意含む風を集めて帰り花
帰り咲く花前の風で磨かれて
紅葉且散る地の鼓動受け止めて

十一月四日 野分会声屋例会
大綿の命の透ける昼下り
大綿や白銀を呼ぶ使者として
初時雨備前の空を引き締めて
初時雨濡れて行きまひよ歩きまひよ

十一月四日 虚子記念文学館投句
責任をひしひし感じ神無月
十一月五日 刈谷市民俳句大会
長旅を三河の秋に締めくくる
道問へば三河訛の爽やかに
その中に命這はせて菊香る

十一月七日 蕉心会
旅続き句会続きて冬に入る
石路の花とは忌心の自づから
神の留守周囲更地となる社
水鳥を色重ね重ねて初時雨
水鳥を色重ね重ねて固し隅田川

十一月八日 「田虹」新年号「田心集」
若水を汲みて新たな旅立へ
初空を仰げば花鳥諷詠詩

御慶述ぶ絆深めてゆく二人
詩心をもて初暦掛けにけり
十一月八日 「田虹」新年号紙撞壺
初刷を繕き歴史重ねゆく

十一月十日 野分会東京例会
初時雨余呉の日差を遠くして
比良の色比叡の色に初時雨
大綿や天に昇らず地に着かず

十一月十一日 朝日カルチャー若草句会
山茶花の紅を淋しと思ふ日々
主亡き山茶花垣の虚ろかな
冬めいて水辺を恋うてゐる羽音
山茶花の未来へ散つてゆきにけり
凧に時を止めたる都心かな
凧に都庁天辺戦けり

十一月十三日 「あらうみ」近詠出句
祝賀終へ冬めく都市となりゆけり
冬めくや君の顔近付けば
佛を重ね冬めく景を行く
冬めいて歩幅大きくなりにけり
その中に人馬沈めて冬めけり

十一月十四日 土筆会
太陽に笑はれながら大根引く
冬構して名苑の縮みゆく
江戸の世を偲ぶ平成石路明り

十一月十五日 「玄海」近詠出句
伝説ももろとも沈め初時雨
恋心濡らしてゆきし初時雨
凧に舞ひ上りたる芥かな
一片の散り山茶花と判るまで
凧に道路乾いてゆきにけり

十一月十六日 中国ホトトギス同人会、大会
冬日和江戸と備前を一枚に
山を見て海を見て鷹見付けたり
あでやかな和服小春を連れて来し

冬蝶の纏るるほどの日和かな
言の葉を紡ぎ山茶花散り初むる
日表といふ米桔藍に紅葉散る
十一月二十一日 ひまわり俳壇選者時
恵方道一誌を統べるてふ覚悟

十一月二十一日 登高会
晴れの国てふ小春日の備前かな
冬紅葉天女となりて還りゆく
西の市三本締め暮れてゆく
冬紅葉倉の歴史を秘めし薦

十一月二十三、二十四日 関西ホトトギス同人会、大会
言霊を載せて御苑の紅葉散る
黄落に京都の空といふ自在
大綿に寒禽の声てふ静寂
詠まれ継ぐための極まり冬紅葉

十一月二十六日 若水句会
冬紅葉都心の音を吸ひ込んで
落葉掃く音に明けゆく園の朝
黄落に園の歴史を重ねゆく
神迎ふ空を仕上げし昨夜の雨
日当り浴び松本楼のカレー食ぶ

十一月二十七日 目黒学園句会
縄張りてより名園の冬構
その葉散る百万坪といふ禱
木の葉雨地球重たくなりけり
十一月二十八日 BS句会
凧のやうに決りしこと一つ
一片の舞ひて山茶花日和かな

十一月三十日 ホトトギス社句会
その中に三色残る枯野かな
新海苔を炙れば子等の起きて来し
今日よりは司会交代冬うらら

雑詠

廣太郎 選

一杯のビールにさらり一ト日終ふ
ちびちびと酒ごくごくとビールかな
喉仏しきりにビール所望する
雷猛り天地創造かくのごと
まがふなき水の惑星植田かな
明易を待み詰込む旅程かな
拾ひたる命と思ふ髪洗ふ
雀来てやや考へる梅雨の窓
七夕の病院食にカード添へ
時鳥声隠り沼にたたきつけ
草笛に卒寿の恋を吹きにけり
蜘蛛落ちし畳の音の更けてぬし
あぢさみに病む人の消息すこし
梅雨寒といふちよつとなつかしきもの
一木の夏草として生きんかな
男より女輝き街五月
葉柳に流るる如く車道あり
雨音のはたと弾みて雹となる

福岡 今中榮泉
同
東京 内藤呈念
同
同 今井千鶴子
同
福山 竹下陶子
同
熊本 岩岡中正
同
同
龍ヶ崎 今橋眞理子
同
同

ビーチボーイ七月一日の闊歩
海の家商ふ一日目の日焼
雲の峰海一望の予約席
海月乗る波の揺り籠波が押す
緑蔭や日向の帷重かりし
水溜り跳んで飛石跳んで梅雨
蛭のまたたくリズム揃ひ来し
風通るよき山蔭よ著莪の花
とろろ飯麦つぶつぶと舌の上
われ見たり銀河と共に行く虚子を
銀漢となりたる虚子の後を追ふ
銀漢となりたる虚子と共に生く
口丸くして白鱈の釣り上がる
退屈な空脱ぎ捨てて皐月富士
身の内を抜けゆく瀬音鮎を釣る
葉に載りしつじ葉に紛れしつじ
花と葉に被ひつくされ躑躅山
往き来する径もあるとよ躑躅山
浅草の芸人らしき夏羽織
江戸情緒のこす浅草麻のれん
浅草を知り尽したる单足袋
水の星洗ひ流して五月雨るる
バイエルのけいこの後のさくらんぼ
裏山は老鶯の森風の森

奈良 古賀しぐれ
同
同
香川 湯川 雅
同
同
樺原 稲岡 長
同
同
群馬 中杉隆世
同
同
神戸 山田佳乃
同
同
熱海 嶋田一步
同
同
東京 橋本くに彦
同
同
芦屋 奥田好子
同
同

雑詠句評（十月号より）

しげ人・比奈夫・純也

佳乃・公次・仁義

一步・雅・さい雪

くに彦・廣太郎

師の今も遺墨に生きて春深し さなま 岡安仁義

遺墨を手を取ってみるにつれ先生のことか思い出されてならない。遺墨を前にした時は、今も尚、導きを受けているように思われるのである。正に師恩であり。美しい師弟愛である。

師の大きさやあたたかさ、眼差しの優しさを象徴している「春」。季題「春深し」が揺るがせない一句である。（しげ人）

どうしても虚子の遺墨を想像してしまいが、確かに作者と虚子の遺墨は深い縁で結ばれている。今はもうこの世に居ない師と仰ぐ人でも、このような遺墨を拜する事で、まるでその人が目の前に居るように感じる事が出来るのである。考えてみると虚子は春に生れて春にこの世を去っている。（廣太郎）

躓いてゐるは波とも海月とも 香川 湯川 雅

波の間に間に漂っている海月は、或時は悠々と波と戯れているように見え、また或時はぎこちなく波に弄ばれているようにも見え、まことに不確かな泳ぎぶり。作者はその様子を新しい視線で、海月が波に躓いているのではないかと思ひ、逆にまた波が海月に躓いていないのではないかと思つたのである。二つの逆の動きは表裏一体なのだが、とりわけ面白いのは波が海月に躓くいう方である。この方だけに絞つて一句に仕立てると、また目覚しい句が出来たような気もする。（比奈夫）

微妙な泳ぎ方をする「海月」を見事に詠んでおられる。ふらふらと波に浮いているだけに見えても、確かに動物としての生命活動をを行っているのである。そんな状態を「躓いてゐる」という言葉で表現しているところが何ともユニークではあるが、正に季節の姿を的確に捉えている。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

江子選

短夜を長しと待ちて喪の旅に 龍ヶ崎 今橋眞理子
 はは父の許へと茅花流し吹く 同
 虚子偲び学ぶわれらや明易き 長岡 安原 葉
 虚子偲び学ぶ夏行や今になほ 同
 恋猫となりて星空独り占め 東京 稲畑廣太郎
 猫の恋とは唐突に繊細に 同
 羅のごとくひらりと七日月 同 今井千鶴子
 よべ梅雨のあえかな月を見し辺り 同
 人知れず泰山木の花黄ばみ 樺原 稲岡 長
 六月はむらきき多し邸の庭 同
 この道は杣しか知らぬ葉狩 東京 河野美奇
 沢筋の白途切れなし山法師 同
 美しき五月の朝を生きてをり 相模原 木村享史
 風五月山河躍つてをりにけり 同
 梅檀の双葉如何にと尋ね来し 神戸 後藤比奈夫
 梅檀の枯木が物を思ひをり 同
 夢の中にも迷ひぬ明易し 群馬 中杉隆世
 短夜といふは白紙のごときもの 同

桜蔭降るや焦土の昔あり 福山 竹下陶子
 桜蔭少年兵の碑に降れる 同
 きふ見てけふ見て母や明易し 熊本 岩岡中正
 明易を目覚めて旅にあるごとし 同
 五月好きことに五月の母校好き 東京 大久保白村
 八十路には八十路の艶や業平忌 同
 明易や今に眠らぬ大都会 同 山田閨子
 被災地に聞く波音や明易し 同
 漂泊の我も詩人や余花の旅 仙台 赤川誓城
 好きなだけ風を貰ひて著莪の花 同
 百ほどの牡丹の影の重さかな 神戸 浜崎素粒子
 灸花抜きさしならぬことばかり 同
 真ツ先に風くぐりゆく茅の輪かな 同 三村純也
 鳩の子のさざ波にさへ紛れさう 同
 恋蛭恋見付かれれば消えにけり 同 後藤立夫
 練供養夜が迎へに来て終る 同
 花辛夷入院患者たちも来る 熟海 嶋田一步
 君知るや銀座マロニエ咲きしこと 同

夏 至 稲畑汀子

今、書齋として使っている部屋は、昔、食堂と居間に使っていた部屋である。その頃使っていた大きなテーブルは何処に行ったのか、今使っている食堂のテーブルは新しく購入したもので、書齋の仕事をするためのテーブルは、玄関ホールに置いてあったものを使っている。次々溜まって行く書類は、整理をしなければいけない。それも、大きな机に置く場所があるからで、いつも頭の中ではこうして、ああしてと整理にいそしんでいるのである。

今年の夏至は六月二十一日、一年で一番日が長く、その日に向って書齋の整理をするつもりにしていた。でも、夏至に係わらず仕事の予定は同じように埋まって行くし旅も多い。

「あーあー！」
ため息をつきながら、夏至を過ぎると、ぐんぐん日が短くなつて行つて、冬至が近づいて行くので悲しい。

「私は夏至が嫌いなのです。この日からだんだん暮れるのが早く

なるでしょう」

朝日カルチャーの時に、そのような話を何度もした。

同じ二十四時間、夏至も冬至もただ日が暮れる時間の長短だけのことであると知っているのに、何故か夏至が過ぎるのが悲しいのである。

「……汀子先生夏至が好き」

朝日カルチャーで俳句会をしたとき誰かがそのような一句を作った。

「え？私、夏至が一番悲しいし、一番嫌いってお話したつもりなのですが」

「わはははは……！」

どつと教室に笑いが起こった。

「まーいいか、先生は好き嫌いを言っつてはいけませんね。ははははは」

夏至も冬至も関わりなく、書齋の整理をしていかなければならないことをしっかりと胸に収めた。